

[研究報告]

看護学生のコミュニケーション・スキルとそのスキルを 活用する重要度・自信度との関連

荒木 善光* 戸渡 洋子 中村 京子

Relationship between nursing students' communication skills and their conviction-confidence
in using those skills

Yoshimitsu ARAKI, Yoko TOWATARI, Kyoko NAKAMURA

要旨

看護大学3・4年生67人を対象に、看護教育におけるコミュニケーション・スキルの学習状況や、コミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）とそのスキルを活用する重要度・自信度との関連を明らかにする目的で自記式質問紙調査を行った。その結果、コミュニケーション・スキルに関する学習状況では、学年間で有意な差があり、段階的に習得していることが示唆された。また、コミュニケーション・スキルを活用する重要度の認識は高く、自信度はばらつきが大きいという特徴があった。ENDCOREsのサブスキルではより高次の「他者受容」や「関係調整」が得意で、「自己主張」や「表現力」が苦手であると自己評価しており、看護学生の特徴と考えられた。自信度と正の相関があった「自己主張」や「表現力」が得意になると、コミュニケーション・スキルを活用する場合に自信が持てるようになる傾向があると推察できた。コミュニケーション・スキルを4年間のカリキュラムの中で一通り知識として教え、演習や実習の中で意図的に使い、重要なスキルは反復練習する機会をより多く持つことが重要であると考えた。

キーワード：コミュニケーション・スキル 看護学生 重要度 自信度

I はじめに

看護基礎教育では専門分野の学習を深める他、職業に必要な倫理観や責任感、豊かな人間性や人権を尊重する意識を育成していくこと¹⁾が求められている。看護学教育モデル・コア・カリキュラム²⁾においても、看護系人材として求められる基本的な9つの資質・能力の1つとして、コミュニケーション能力が挙げられている。さらに、看護学生のコミュニケーション能力は看護職への傾倒や意欲を高めることにもつながる³⁾とされており、コミュニケーション能力は看護基礎教育における基本的なスキルとして教育されている。

看護教育における看護学生のコミュニケーション能力の習得に関しては、「講義・演習-病院見学実習」という一連の授業展開が、学生のコミュニケーション・スキル習得に効果的である⁴⁾ことや、4年間で習得するコミュニケーション・スキルとして接遇や積極的傾聴、観察、アサーションなどの基礎的技術から、言語化、感情のコントロールなどの応用技術へと段階的に指導する必要がある⁵⁾ことが報告されている。また、模擬患者を活用した演習を通して看護系大学生の学習意欲およびコミュニケーション能力の変化について調査した研究⁶⁾では、対象者とのコミュニケーションを円滑に進めることに対する自己評価は高く、学習への興味に対する学習意欲

が増加していたものの、相手の背景に踏み込んだコミュニケーションに困難を感じて、自己評価の低下がみられている。この研究では、対象者が少ないため、結果の解釈には限界があるとされており、学習意欲が上昇するためには何を学習したらよいかについて明確化することには至っていない。さらに、コミュニケーションを高める教育方法を検討した研究⁷⁾では、演習で獲得したコミュニケーション・スキルを実践する中で、自己の振り返りを行い、コミュニケーション・スキルを実践できるようになった自信を得て、その大切さについて理解していることを示唆している。コミュニケーションを苦手と自覚する看護学生の特性に関する研究⁸⁾によると、コミュニケーションに対する苦手意識から自己に対する否定感が働き、自尊感情を低める要素として挙げられている。

これらの研究から、看護学生がコミュニケーション・スキルを学習する過程において、コミュニケーション能力を活用する自信や重要性に関する認識を高める教育を、併せて行うことが必要であると考えられる。そこで、本研究は「看護学生のコミュニケーション・スキルの向上のための動機づけ面接を取り入れた学習効果に関する研究」の一環として、看護教育におけるコミュニケーション・スキルの学習状況や、コミュニケーション・スキル尺度とそのスキルを活用する重要度・自信度との関連を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 調査対象

B大学の看護学生（3・4年生）、合計232人のうち、調査に協力の得られた67人

2. 調査期間

2017年11月

3. 調査方法

B大学の看護学生（3・4年生）が集まる講義以外の時間を活用し、研究実施責任者が調査協力の依頼を行った。その際、学生の自由意思に基づき、研究への参加の有無が学業成績や評価に影響を与えないこと等を説明し、無記名自記式質問調査票を配布した。調査の協力については、後日、回収ボックス

を設置し、同意書と質問調査票を回収した。

4. 調査内容

調査項目の内容は、基本属性（年齢、性別）、保健師課程の選択の有無、コミュニケーション・スキルの学習状況、コミュニケーション・スキル尺度（以下、ENDCOREsとする）^{9,10)}、コミュニケーション・スキルを活用する重要度・自信度である。

コミュニケーション・スキルの学習状況では、B大学のコミュニケーション・スキルに関連するシラバスを一部参考とし、1) アサーティブネス・コミュニケーション、2) ノンバーバル・コミュニケーション、3) 傾聴、4) ポジティブメッセージ、5) 閉じた質問・開いた質問、6) 単純な聞き返し・複雑な聞き返し、7) 是認、8) 要約、9) リフレーミング、10) ストレスマネジメント、11) コーチング、12) 動機づけ面接の12学習項目に対して、「これまでに学んだことがあるか」と「これまで学んだことがないか」の選択肢を用いて質問した。

コミュニケーション・スキル尺度には、藤本・大坊が作成したENDCOREs^{9,10)}を用いた。ENDCOREsとは、言語及び非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーション・スキルを測定する尺度である。計24の各質問項目から、「かなり得意」、「得意」、「やや得意」、「ふつう」、「やや苦手」、「苦手」、「かなり苦手」の7段階で回答し、「自己統制」、「表現力」、「解読力」、「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」の6つの下位スキルごとに得点数を加算し、4つの質問項目数で除して尺度得点として測定される。前者の3つ（「自己統制」、「表現力」、「解読力」）は、「基本スキル」、後者の3つ（「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」）は、「対人スキル」にそれぞれ分類され、基本スキルよりも対人スキルの方が、より高次のコミュニケーション・スキルとして位置づけられている。

コミュニケーション・スキルを活用する重要度・自信度には、臨床で意思決定を行う際に有用である患者の行動変容モデル¹¹⁾や禁煙指導者研修における動機づけ面接法の有効性¹²⁾に関する報告に使用されている自信度と重要度のスケールを参考として、「まったく重要でない／まったく自信がない」から「とても重要である／とても自信がある」について、

0から10までの11段階の数字を用いて質問した。

5. 分析方法

コミュニケーション・スキルの学習状況とコミュニケーション・スキルを活用する重要度・自信度、ENDCOREsについては、記述統計を用いて分析し、あわせて学年別、自信度の群別の比較を行った。学年は「3年生」と「4年生」で、自信度は「低得点群（0-4点）」と「高得点群（5-10点）」の2群に分けて分析した。コミュニケーション・スキルの学習状況については、カイ二乗検定またはFisherの直接確率法によって学年別の分布の偏りを分析し、ENDCOREsの下位スキルの点数についてはMann-Whitney U検定によって比較を行った。コミュニケーション・スキルを活用する重要度・自信度およびENDCOREsの下位スキル間の関連性については、Spearmanの順位相関係数を算出して分析した。なお、統計ソフトはIBM SPSS ver. 25.0 for Windowsを用い、有意水準は5%未満とした。

6. 倫理的配慮

対象者に十分な説明を行った上で、本研究への参加について、自由意思に基づく同意を得た。その際に、研究において収集したデータおよびその分析結果を研究目的以外に用いることはなく、研究への参加の有無が学業成績や評価に影響を与えないこと、個人が特定されることのない形で公表されること、それによって不利益を受けることがないことについて書面及び口頭による説明を行った。また、研究への参加について十分考える時間を設け、調査協力の承諾を得るとともに、研究協力の意思は同意書への署名によって確認した。データの開示や削除希望の申し出に対応するために、同意書と同じ符号を割り振った無記名自記式質問調査票を使用し、それぞれ別に鍵のかかるボックスにて管理した。同意撤回の申し出がある場合には、データを掲載した論文等が公開された後は、同意したデータを削除できない旨を説明した。本研究は、熊本保健科学大学ライフサイエンス倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号17032）。

Ⅲ 結果

1. 対象者の基本属性

対象者232人のうち、67人から回答を得た（回収率：28.9%）。年齢は 21.4 ± 0.9 歳（平均値 \pm 標準偏差）、性別は男性が7人（10.4%）、女性が60人（89.6%）で、学年は3年生が28人（41.8%）、4年生が39人（58.2%）であった。保健師課程を選択している人は28人（41.8%）、選択していない人は39人（58.2%）であった（表1）。

表1. 基本属性

		人数	%
性別 (N=67)	男性	7	10.4
	女性	60	89.6
学年 (N=67)	3年生	28	41.8
	4年生	39	58.2
保健師課程 (N=67)	選択あり	28	41.8
	選択なし	39	58.2

2. コミュニケーション・スキルの学習状況

コミュニケーション・スキルの学習状況について、図1に示した。「これまでに学んだことがある」と回答した人が多かった学習項目は、「傾聴」66人（98.5%）、「閉じた質問・開いた質問」66人（98.5%）、「要約」55人（82.1%）、「ノンバーバル・コミュニケーション」51人（76.1%）、「ストレスマネジメント」50人（74.6%）、「単純な聞き返し・複雑な聞き返し」41人（61.2%）、「アサーティブネス・コミュニケーション」41人（61.2%）、「ポジティブメッセージ」36人（53.7%）であり、少なかった学習項目は、「コーチング」28人（41.8%）、「動機づけ面接」24人（35.8%）、「是認」22人（32.8%）、「リフレーミング」18人（26.9%）であった。

学年別にみると「ノンバーバル・コミュニケーション」、「ストレスマネジメント」、「アサーティブネス・コミュニケーション」、「ポジティブメッセージ」、「コーチング」、「動機づけ面接」、「是認」の学習項目において、4年生が3年生よりも「学んでいる」と回答した人が有意に多かった。一方で、「傾聴」、「閉じた質問・開いた質問」、「要約」、「アサーティブネス・コミュニケーション」の項目は、学年による差はなかった（表2）。

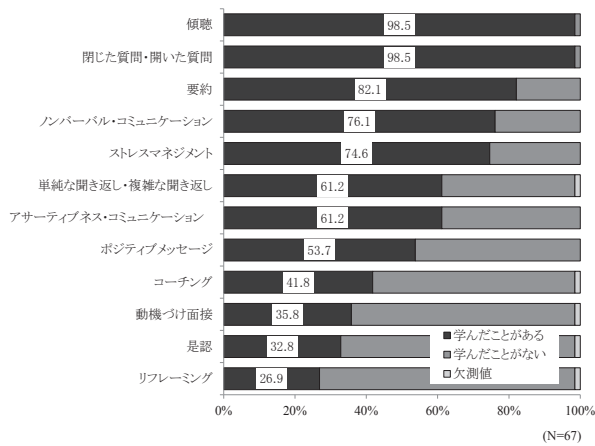


図1. コミュニケーション・スキルに関する学習状況

表2. 学年別のコミュニケーション・スキルの学習状況 (学習あり)

	3年生 (n=28)		4年生 (n=39)		P 値
	人数	%	人数	%	
傾聴	27	96.4%	39	100.0%	0.418
閉じた質問・開いた質問	27	96.4%	39	100.0%	0.418
要約	20	71.4%	35	89.7%	0.103
ノンバーバル・コミュニケーション	17	60.7%	34	87.2%	0.019
ストレスマネジメント	16	57.1%	34	87.2%	0.009
単純な聞き返し・複雑な聞き返し	15	53.6%	26	66.7%	0.442
アサーティブネス・コミュニケーション	9	32.1%	32	82.1%	<0.001
ポジティブメッセージ	9	32.1%	27	69.2%	0.003
コーチング	5	17.9%	23	59.0%	0.002
動機づけ面接	2	7.1%	22	56.4%	<0.001
是認	5	17.9%	17	43.6%	0.038
リフレーミング	3	10.7%	15	38.5%	0.023

3. コミュニケーション・スキルの重要度・自信度

コミュニケーション・スキルを活用する重要度と自信度の分布を図2に示した。図中のプロットの大きさは人数を表す。重要度は 8.7 ± 1.4 点 (平均点 \pm

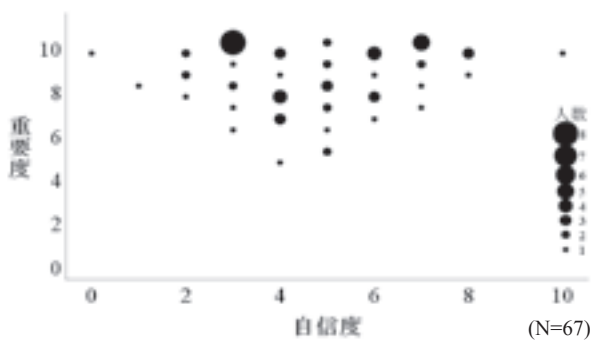


図2. コミュニケーション・スキルの重要度・自信度の分布状況

標準偏差), 自信度は, 4.7 ± 2.0 点 (平均点 \pm 標準偏差)であった。コミュニケーション・スキルを活用する重要度については5点以上に分布しているが, 自信度については, 0点から10点まで幅広い分布となっていた。

4. コミュニケーション・スキル尺度 (ENDCOREs)

ENDCOREsを用いた6つの下位スキルにおいて, 基本スキルである「読解力」が 4.7 ± 0.9 点 (平均点 \pm 標準偏差), 「自己統制」が 4.6 ± 0.7 点, 「表現力」が 3.9 ± 1.0 点であり, 対人スキルである「他者受容」が 5.3 ± 0.9 点, 「関係調整」が 4.8 ± 0.9 点, 「自己主張」が 3.7 ± 1.1 点であった (図3)。

コミュニケーション・スキルの下位スキルを学年別 (3・4年生) にみると, 基本スキルである「読解力」, 「自己統制」, 対人スキルである「他者受容」, 「関係調整」において3年生よりも4年生の方が有意に多かった (表3)。

コミュニケーション・スキルの下位スキルを自信度別 (低得点群: 0-4点, 高得点群: 5-10点) にみると, 基本スキルである「表現力」, 対人スキルである「自己主張」において高得点群の方が有意に多かった (表4)。

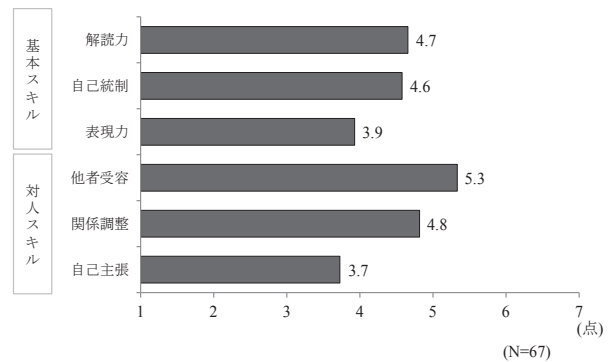


図3. ENDCOREs の状況

表3. 学年別の ENDCOREs の状況

		3年生		4年生		P 値
		M	SD	M	SD	
基本スキル	読解力	4.34	0.79	4.88	0.92	0.080
	自己統制	4.37	0.67	4.73	0.74	0.040
	表現力	3.73	1.06	4.07	0.98	0.266
対人スキル	他者受容	4.79	0.95	5.46	0.95	0.008
	関係調整	4.45	0.84	5.08	0.82	0.005
	自己主張	3.68	0.78	3.76	1.25	0.903

表4. 自信度別の ENDCOREs の状況

		低得点群(0-4点)		高得点群(5-10点)		P 値
		M	SD	M	SD	
基本スキル	解読力	4.55	1.00	4.75	0.82	0.280
	自己統制	4.43	0.70	4.71	0.73	0.105
	表現力	3.48	0.97	4.34	0.90	<0.001
対人スキル	他者受容	5.00	1.23	5.13	0.66	0.067
	関係調整	4.66	0.90	4.96	0.84	0.261
	自己主張	3.35	1.04	4.07	0.99	0.009

5. コミュニケーション・スキルの重要度・自信度と ENDCOREs との関連性

ENDCOREs の各下位スキルと重要度・自信度の相関関係では、「重要度と他者受容 ($r=0.37, p<0.01$)」, 「自信度と表現力 ($r=0.53, p<0.01$)」, 「自信度と自己主張 ($r=0.35, p<0.01$)」, 「自信度と他者受容 ($r=0.30, p<0.05$)」, 「自信度と関係調整 ($r=0.26, p<0.01$)」において正の相関がみられた。各下位スキルの相関については、「他者受容と関係調整 ($r=0.67, p<0.01$)」との間で有意な比較的強い正の相関を示した(表5)。

IV 考察

本研究では、看護大学3・4年生67人を対象に、看護教育におけるコミュニケーション・スキルの学習状況や、コミュニケーション・スキルとそのスキルを活用する重要度・自信度との関連を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を実施した。あわせて、コミュニケーション・スキルを活用するという行動に対する自信度と重要度といった学生の認識が向上するための教育や学習について検討した。

1. コミュニケーション・スキルの学習状況

コミュニケーション・スキルの学習項目において、「傾聴」や「閉じた質問・開かれた質問」については、ほとんどの学生が学んでいると回答していた。「リフレーミング」, 「動機づけ面接」, 「是認」などを学んでいる人が少なかった項目には、学年差が認められ、3年生よりも4年生の方が学んでいると多く回答していた。調査時点までにそれらの項目を授業で学び、実際に意識して使っているかという経験の差が学生の認識に影響していると考えられる。このことは、上野⁵⁾の「段階別コミュニケーション能力」習得過程の報告とも一致する。コミュニケーションを学ぶ過程の中で、3年生までに「傾聴」や「閉じた質問・開かれた質問」のような基礎スキルを身につけ、学年が上がるに伴い「動機づけ面接」や「是認」といった問題解決技法に相当する、より高度な項目を身につけていったと考えられる。B大学では4年間にわたり、カウンセリング技法に関する科目、基礎看護系の科目、領域毎の科目など様々な科目の講義・演習・実習の授業を通して段階的にコミュニケーション・スキルを学習する機会がある。基礎スキルについてはコミュニケーションの基本でもあり、それぞれの科目で繰り返し学び、スキルとして使う機会も多いと思われる。しかし、「リフレーミング」, 「動機づけ面接」, 「是認」などの項目は、高度なスキルであり、科目で学ぶ頻度も少ないだけでなく、科目で学んだ後にスキルとして使う機会も少ない。仮に「是認」や「リフレーミング」のスキルを実践していたとしても、その実践しているスキル名と一致して認識していない学生もいる可能性がある。そのため学生は、学年進行にあわせて、3年生までに履修する科目で学ぶ基礎スキルの項目の方が、コミュニケーション・スキルとして学んだ

表5. 重要度・自信度・ENDCOREs の関係

		重要度	自信度	ENDCOREs				
				自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容
自信度		.07	-					
ENDCOREs	自己統制	-.22	.20	-				
	表現力	.15	.53**	.10	-			
	解読力	.01	.18	.27*	.40**	-		
	自己主張	-.24	.35**	.10	.44**	.23	-	
	他者受容	.37**	.30*	.23	.15	.21	-.13	-
	関係調整	.14	.26*	.43**	.25*	.31*	.01	.67**

* P<0.05 **P<0.01

と認識しているのではないかと考えられる。

これらのことから、看護学生が4年間の看護基礎教育の中で段階的に学習したコミュニケーション・スキルを、日頃から意図的に使えるような学習環境を整え、それらを反復練習する機会を増やすことが重要である。具体的には、授業の中でグループでの課題解決をしなければならないような状況をより多く設定し、その中で対人関係の調整をしたり連携したりすることを意図的に求めるなどの学習方法が考えられる。

2. コミュニケーション・スキルとそのスキルを活用する重要度・自信度との関連

コミュニケーション・スキルを活用する重要度と自信度では、重要度は5点以上に分布し、自信度は、0点から10点まで幅広く分布していた。看護学生のコミュニケーション・スキルを活用する重要度の認識は高く、自信度はばらつきが大きいという特徴を示唆している。重要度は、ENDCOREsの「他者受容」と正の相関($r=0.37$)があり、対象者全体でも重要度は高いが、中でも「他者受容」が「得意である」と回答した学生はより重要度を高く認識していた。自信度は、「表現力($r=0.53$)」、「自己主張($r=0.35$)」、「他者受容($r=0.30$)」、「関係調整($r=0.26$)」と正の相関があり、これらのスキルが「得意である」と回答した学生は、自信度も高く認識していた。基本スキルである「読解力」、「自己統制」、対人スキルである「他者受容」、「関係調整」においては学年の高い方が、有意に「得意である」と回答しており、4年間の看護教育の中で身につけることができるスキルであると考えられる。

一方で「表現力」や「自己主張」は自信度の高い群の方が、有意に「得意である」と回答しており、ENDCOREsで測定したコミュニケーション・スキルの中でも、「自己主張」や「表現力」が苦手であると自己評価していた。コミュニケーション・スキルの中でも、「表現力」や「自己主張」が得意になると、コミュニケーション・スキルを活用する場合に自信が持てるようになる傾向があると示唆される。小集団の中で自分の意見を言ったり、相手の話を聴いたりできることで、日常のコミュニケーションに肯定的な変化を感じとり、コミュニケーション・スキルを実践することの効果に気づく⁷⁾という報告からも、「他者受容」、「関係調整」に加えて、「表現力」、

「自己主張」といったコミュニケーション・スキルの向上や自信の獲得につなげる必要がある。

ENDCOREsで測定したコミュニケーション・スキルでは、「自己統制」や「読解力」といった基本スキルより、「他者受容」や「関係調整」といった対人スキルを高く評価していた。ENDCOREsでは、基本スキルより対人スキルの方が高次のコミュニケーション・スキルとして位置づけられている。他者との関係性の構築が基盤にある援助職を養成する看護基礎教育において、患者を中心に様々な関係職種と連携し、協働的に関わる姿勢として、「他者受容」や「関係調整」は重要なスキルである。より高次の「他者受容」や「関係調整」が得意であり、「自己主張」や「表現力」が苦手であると自己評価していたことは、この年代の看護学生の特徴と考えられる。

特に、「他者受容」と「関係調整」は両者の相関が $r=0.67$ と強い正の相関があり、これは先行研究⁹⁾と同様な結果であった。対象である学生は「他者受容」や「関係調整」について、相手の意見や立場を問わず、自己主張せずに相手に合わせ、自分が我慢するという受動的な行動によって他者との関係を調整するものであるととらえている可能性がある。自己主張せずに相手に合わせるような受動的な関係調整ばかりでは対人ストレスを抱えやすく、十分な問題解決に至ることができない。コミュニケーションに対する苦手意識から自己に対する否定感が働き、自尊感情を低下させる要素となりうる⁸⁾という報告もあり、これらの対人ストレスや自尊感情の低下が看護職のバーンアウトにつながることも考えられる。

そのため基礎教育の段階から、現在学生が苦手ととらえている「表現力」や「自己主張」のスキルを高めることは、コミュニケーション・スキルを活用する自信度を高めることにつながるのではないだろうか。「表現力」や「自己主張」に関するスキルを学び、それを使って「関係調整」がスムーズにできるという成功体験を積み重ねることでコミュニケーションを活用するための自信度が高まり、自己に対する肯定感から自尊感情が高まる。その結果、対人関係も円滑になり、看護職としての充実感ややりがいにもつながると考える。保健・看護系以外の学部と比較しても、実習等にて「共感すること」や「プレゼンテーションすること」の機会が多い保健・看

護学系の学生は、これらのスキルが著しく向上するだけでなく、奉仕的な精神も培われている¹³⁾という報告もあり、看護基礎教育におけるコミュニケーション・スキルの向上は、看護師としての倫理観にも影響する重要な要素といえる。

看護職のバーンアウトに関しては、対人援助職のバーンアウト予防効果に着目した研究¹⁴⁾があり、動機づけ面接 (Motivational Interviewing) を対象者との面談に取り入れることで、対人援助ストレスの軽減に貢献する可能性が高いという報告もある。この動機づけ面接については、カール・ロジャーズの提唱した来談者の自律性を重んじる来談者中心的療法と、行動変容に向け一定の方向づけをする目標指向的な要素を併せ持つ「行動変容への動機と決心を強化するための協動的な会話スタイル¹⁵⁾」と定義されている。このような専門的な面接スタイルを授業の中で学習し、実践できるようになることも、学生のコミュニケーション・スキルを活用する自信度を高めることにつながると考えている。他にもコミュニケーション・スキルに関する項目として、「アサーティブネス」、「リフレーミング」、「是認」など学生が学んだとらえてないが、看護職として知っておくと役立つ重要なスキルもある。すべてを基礎教育の中で深く学習し修得していくことは困難であるが、4年間のカリキュラムの中で一通りの知識をもち、演習や実習の中で意図的に使うという経験をさせることは可能であると思われる。今後、大学全体として取り組むことを検討する必要がある。

3. 本研究の限界

本研究の限界として、コミュニケーション・スキルの学習状況に関する項目が12項目に限られており、その学習の有無について質問を行っていた点が挙げられる。そのため、各学習項目に対する理解度については、言及できない。これまで学習したコミュニケーション・スキルとして挙げた12項目について、どのようなスキルなのか、調査対象である学生が理解している状況にも影響を受けている可能性がある。回答が少なかった学習項目については、実は知っている、言葉として理解していないという可能性や、聞いたことはあるが、内容は知らないという可能性もあるため、結果を解釈する際には、これらのことに留意する必要がある。また、本研究は回答率が低く、調査に協力的な人に偏っていると考えられるの

で、コミュニケーション・スキルを活用する重要度が過大に評価されている可能性がある。さらに、コミュニケーション・スキルを測定する尺度として ENDCORES を用いたが、模擬患者によるコミュニケーションに関するチェックポイント¹⁶⁾ や対人コミュニケーション尺度¹⁷⁾ など、様々なコミュニケーションの尺度があり、それぞれとらえている側面が異なるため、今回の結果が、ENDCOREs を用いた一側面のみ結果であることに留意を必要とする。

V おわりに

コミュニケーションに関する学習状況では、「傾聴」、「閉じた質問・開いた質問」、「要約」の項目で「学んだことがある」と回答し、「リフレーミング」、「動機づけ面接」、「是認」の項目は「学んだことがない」の回答が多かった。これらには学年間で有意な差があり、段階的に習得していることが示唆された。また、コミュニケーション・スキルを活用する重要度の認識は高く、自信度はばらつきが大きいという特徴があった。

ENDCOREs のサブスキルでは、より高次の「他者受容」や「関係調整」が得意で「表現力」や「自己主張」が苦手であると自己評価しており、現在の看護学生の特徴と考えられた。「表現力」や「自己主張」は、自信度と正の相関があり、「表現力」や「自己主張」が得意になると、コミュニケーション・スキルを活用する場合に自信が持てるようになる傾向があると推察できた。

本研究は平成29年度熊本保健科学大学の助成（学長裁量経費）を受けて実施したものである。本研究の一部は、The 3rd Allied Health Science International Symposium in Medical Technology And Nursing, 2018において発表した。本研究における利益相反は存在しない。

謝辞

本研究に協力して頂きました対象者の皆様に心より感謝いたします。

文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 2007.
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2017年11月10日検索)
- 2) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラム. 2017.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afildfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (2017年11月10日検索)
- 3) 廣瀬春次, 太田友子, 井上真奈美, 他：看護学生のコミュニケーション行動に関する研究. 山口県立大学学術情報, 4 : 47-53, 2011.
- 4) 幸史子, 岩井眞弓, 小山記代子, 他：看護学生のコミュニケーション・スキル習得に関する研究. 帝京大学福岡医療技術学部紀要, 10 : 1-10, 2015.
- 5) 上野栄一：看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度の開発. Journal of Health Counseling, 20 : 59-69, 2014.
- 6) 森谷利香, 九津見雅美, 池田七衣, 他：看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究. 千里金蘭大学紀要, 8 : 191-199, 2011.
- 7) 石飛マリコ, 金山正子, 焼山和憲：看護系大学入学後の初期段階におけるコミュニケーション・スキルを高める教育方法の検討－対話技法の効果に焦点をあてて－. 福岡大医紀要, 40(1/2) : 73-80, 2013.
- 8) 酒井美子：コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 第5巻 : 103-114, 2010.
- 9) 藤本学：コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討. パーソナリティ研究, 22 : 156-167, 2013.
- 10) 藤本学, 大坊郁夫：コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15 : 347-361, 2007.
- 11) Keller VF, White MK: Choices and changes: a new model for influencing patient health behavior. J Clin Outcomes Manage, 4 (6) : 33-36, 1997.
- 12) 加濃正人, 磯村毅, 稲垣幸司, 他：禁煙指導者研修における動機づけ面接法の「2つのやり方練習」の有用性について. 日本禁煙学会雑誌, 5(3) : 79-89, 2010.
- 13) 石井秀宗, 椎名久美子, 柳井晴夫：看護大学生の学習活動と学習意欲等に関する研究. Quality Nursing, 9 : 972-986, 2003.
- 14) 北田雅子：対人援助職のバーンアウトの予防に動機づけ面接が果たす役割. 札幌学院大学総合研究所紀要, 4 : 37-45, 2017.
- 15) 加濃正人：今日からできるミニマム禁煙医療 第2巻 禁煙の動機づけ面接法. 中和印刷, 2015.
- 16) 藤崎和彦：【看護教育における SP (模擬患者) 活用法の可能性】模擬患者によるコミュニケーション教育 その歴史とコミュニケーションのポイント. Quality Nursing, 7 : 548-556, 2001.
- 17) 一宮厚, 福盛英明, 松下智子：大学生を対象とした対人コミュニケーション尺度の開発：信頼性と妥当性. 健康科学, 35 : 9-15, 2013.

(平成31年1月7日受理)

Relationship between nursing students' communication skills and their conviction-confidence in using those skills

Yoshimitsu ARAKI, Yoko TOWATARI, Kyoko NAKAMURA

Abstract

The purpose of this study was to clarify the current state of communication education within a nursing course and to investigate the relationship between the conviction-confidence model, which enhances communication, and an individual's overall communication skills. Third and fourth-year nursing students were recruited for the study (67 participants), and their current communication skills, current score on the ENDCOREs communication skills scale, and their levels of conviction and confidence were all assessed.

Results showed that there were significant differences in communication ability between students in different grades, suggesting that they were progressively learning these skills. They were highly aware of the importance of utilizing communication skills, and there was substantial variation in the degree of confidence among them. With respect to the sub-skills of the ENDCOREs scale, they evaluated themselves as strong in “the acceptance of others” and “the regulation of interpersonal relationships” at higher levels and weak in “assertiveness” and “expressivity”, which are considered to be characteristic features of nursing students. We speculated that there is a tendency for the students to become confident in using communication skills when they are strong in assertiveness and expressivity, which are both positively correlated with their degree of confidence. We propose that it is important to expressly teach communication skills as a form of knowledge across the four-year curriculum and give the students more opportunities to repeatedly use these skills during exercises and training.